

インマヌエル（神が共にいます）

奨励	関 雅人〔せき・まさと〕
奨励者紹介	日本キリスト教団大津東教会牧師

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

(マタイによる福音書 1章18―25節)

はじめに

ここでの奨励は2回目です。実は私、同志社の卒業ではないので、チャペル・アワーにどういう方が来ておられるのか、なかなか想像がつかませんでした。もしかしたら聖書を読むことも初めての方、教会に行ったことがない方もいらっしゃるだろうと思い、その方々にも少しは理解してもらえるように、ちょうどクリスマスシーズンでもありますし、それにちなんだお話を、準備させていただきました。

誕生物語のハードル

聖書には、福音書が四つあります。福音書というのは、イエス・キリストの教えや行い、業を紹介するものですが、マタイ、マルコ、ヨハネ、ルカ、この四つの福音書があります。その中でイエス・キリストの誕生の様子を書いてあるのは、今日読んでいただいた、マタイによる福音書、それからルカによる福音書の二つです。一般的なのは、ルカによる福音書かもしれませんが。天使が現れ、羊飼いたちが馬小屋に寝かしているイエスを拝んだとか、ちょっと馴染み深いかもしれません。聖書を手にした人がマタイによる福音書を読もうと思いますと、厄介な高いハードル（受入れがたいこと）があるのです。まず1章の最初には、わけの分らない人の名前がズラッと書き連ねられています。「この人たちは、なんだろう」と思いながら読み進めます。すると次のハードル、「処女マリアからイエスが生まれた」と天使がヨセフに告げたという、私たちに受け入れがたい内容がやってきます。マリアが妊娠している。今でこそシングルマザーや同棲など一般的にも認知され、受け入れられていますが、今から2000年前、当時、結婚前に男女が関係をもつというのはタブーとされ厳禁でしたし、もし姦淫した場合、その女性死罪とされていました。これはヨハネによる福音書の8章に書かれています。

読んでいただいた箇所の「ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」。これをどのように理解されますか。ヨセフとマリアがまだ関係していなかったとします。ところが天使が来て「あなたの奥さん（まだ結婚前です）、妊娠して赤ちゃんがいますよ」と告げられる。正しかっただけにヨセフは驚愕したと思います。そして悩むわけです。思い悩んだ結論が、密かに離縁しようとする事です。密かに別れてしまおうと考えたのです。

それに対する一つの考えとして、マリアを捨てて自分は正しい人の道をそのまま歩んでいこうと考えたのは卑怯じゃないか、ということがあります。もう一つは、ヨセフとマリアの婚約というのは多分、親戚や町の多くの人が知っていたでしょう。縁を切ろうとする時、ふたりの婚約を知っている人たちの非難の目はマリアのところではなく、自分に向かうように、そう考えたのかもしれませんが。自分が非難を一手に引き受けて「宗教上の法律違反をしたひどい奴はヨセフだ。そしてマリアを離縁した。ヨセフはとんでもない奴だ」という非難を甘んじて受けて、マリアをかばおうとしたのか。それは分かりません。

クリスマスの讃美歌から

今日、クリスマスの時ですから、クリスマスによく歌われる讃美歌のことをご紹介しますと思います。「もろびとこぞりて」や「あら野の果てに」、「きよしの夜」などは、教会に行ったことのない人でも耳にする讃美歌ですが、その一つをご紹介しますと思います。

「きよしの夜」は、作者はヨーゼフ・モール（1792年～1843年）といわれ、ザルツブルク（モーツァルトやカラヤンの出生地）という当時は小さい独立国だった町に生まれた人です。フランス革命やナポレオン戦争といった政情不安定な時で、ザルツブルクも相当揺れ動いた、そういった時に生まれ育ち、青年期を送ります。モールの父は兵士でしたが、モールが生まれる前に逃亡し、いなくなったわけです。母はひとりでモールを産み、祖母がいましたが、父親のいない子でした。複雑な環境で、1番上の姉はモールと父親が異なり、2番目の姉は養女、それぞれ父の異なる2人の弟がいました。5人子どもがいて5人も父親が違います。2000年前ではなく18世紀ですが、カトリックの戒律では結婚する前に子どもを産むことは犯罪行為とされ、モールの母は4回裁かれ、4回罰金を払っているのです。そういうなかでモールが育ちます。当時、世間から白い目で見られて辛い少年期、青年期を送ったと思います。

しかし彼には援助してくれる篤志家がいて、その援助で高校を卒業し、その後カトリック教会の司祭になる学校を出て、オーベルンドルフという町の非常に小さい貧しい教会の司祭となります。その教会は、司祭が住まう家（司祭館）もなく、彼は教会の関係者の家を間借りしてそこに住み、食事は村の小さい食堂でとったそうです。決して日の当たる司祭の道ではなかったのです。

1818年12月24日、自分が2年前に書いた詩をなんとか歌にして歌いたいと思い、グルーバーという教会のオルガニストに歌詞を渡しました。グルーバーはすぐさまそれを楽譜にしました。それが「きよしの夜」です。この「きよしの夜」は、きれいな讃美歌だと思われるかもしれませんが、それを書いた人はそんな生易しい生涯を送ったわけではないのです。小さい時から父親の違う姉妹たちと一緒に育ち、そして司祭になってからも、司祭の住む家もないような小さな貧しい教会で彼は司祭の道を歩くわけです。その夜、イブ礼拝後の祝会で、2人がモールのギター伴奏で歌ったのが「きよしの夜」だと言われております。

インマヌエル

この讃美歌は3節までの歌ですが、ドイツ語の歌は6節まであります。その6節の最後にあるのが非常に強い文体で、「救い主は現にここにおられる」とあります。イエス、マリア、ヨセフの一家が村の人たちから、どういう目で見られ生活していたのかということを考えると、モールと重なるところがあるように思います。そういうなかにあったからこそ、「救い主は現にここにおられる」と強い確信に満ちた言葉が語れるのではないのでしょうか。

宗教改革者のルターは、「処女降誕は神にとってごくささやかな奇跡です。神が人となりたもうたこと、これこそが遥かに大きな奇跡です」と言っています。

私たちが行き詰った時、そこにこそ、貧しく飼ひ葉桶の中に生まれてくださったイエス・キリストがおられるのだ、というところに目を向けていただければと思っています。